

日韓人としての自覚と責任感

1. 韓国のことばと文化を学んで

韓国語研修では、韓国語の文法を韓国語で習うという直接法で授業を受けた。時に、英語を使用する場面もあったがほぼ韓国語による授業だった。これまで私が受けた外国語の授業は日本語で説明を受ける間接法によるものだったので初めての直接法による外国語の授業はいろいろな違いがあり興味深かった。まず、先生のジェスチャーや表情が豊かであることが挙げられる。新出の単語を学ぶときは、先生が韓国語で説明するのだがジェスチャーや表情が豊かで学習者の私たちも自然と表情が緩んだりしてとても良いクラスの雰囲気だった。分かりやすいだけではなく、クラスの緊張をほぐすという理由からも良い効果があると思い後半の実習に取り入れたいと考えた。直接法によるメリットは、文脈が切り取られないため学んだ言葉を実際の場面ですぐに使うことができる点である。街で韓国語を使うときに何て言おうか考えるのに日本語が媒介していないことに気づいたとき、今まで感じたことのない不思議な感覚を感じた。この場面ではこの単語やフレーズという場面の中で言葉を覚えることで、単語を使うときにこの単語は今使うことができるのかどうかという不安や迷いが低減すると考える。また、クラスにおいて韓国語が主要言語であったために抵抗感なく発言することができることもメリットの一つである。実際、クラスだけでなく街中で買い物をしたり、韓国人と会話したりなど様々な場面で韓国語を話す機会が多くあった。今までは完璧な文章でないと言話をためらったりしていたが、今回は分からないと困るという必要性にも後押しされ、積極的に話すことができた。

しかし、直接法はメリットだけではない。まず一つに語彙力がある程度ないと授業についていくのが難しいという点が挙げられる。私のクラスは秋クラスで主に初級終了・中級レベルの学習者対象が前提のクラスだった。しかしレベル分けテストがマークシートであったためか個人のレベルはバラバラであった。クラスの中には新出単語を説明する易しい単語でつまづいている人が、分からなくて意気喪失している姿が見られた。私もたまたま説明を受けてもいまいち分からない単語があったが、授業中はなんとなく推測しておいて授業後に調べるようにした。推測する楽しさも直接法の良さではあるが、あまりにも分からないとやる気を削がれてしまうと感じた。また、私が韓国語で言いたい表現を先生に聞くことは難しいという点もある。日本語もできる先生であれば、日本語で質問して伝えたい微妙なニュアンスも受け取ってくれるだろうが、韓国語しか話せない先生だと先生に質問すること自体が難しい。聞いて内容を理解することより、自分の考えをまとめて質問する方が難しいと感じた。

これまで韓国を訪問したことはあるが、一ヶ月半という長い期間は今回が初めてだった。旅行者というよりは生活者として韓国に滞在してさらに韓国の魅力を感じることができた。私たちは電車の中やバスの中でよくおじいさんやおばあさんに話しかけられることが多かった。日本に旅行したことがあるよ、日本で就職してたよなど日本語で話しかけてくれてとても嬉しい気持ちになると同時に、本当に韓国には反日感情などあるのかと感じることがあった。一ヶ月半生活して日本人だからといって何か差別されたりなど全くなかったためメディアで報道されている「反日」という実感はわかかなかった。むしろ韓国人の情の厚さにはいつも驚かされる。日本は「おもてなし」というキーワードでオリンピック招致に成功したが、私は韓国の方がおもてなしの気持ちが強いと思う。私自身見習わなければと思わされる場面が多くあった。この一ヶ月半の間にお世話になった韓国人のひとりの別れが一

番辛かった。また再会できる日までに成長した姿を見せられるように日々を過ごしたいと思った。

2. 日本語教育実習

私が担当した「日本語 B1-2」のクラスは、すでに N1 を取得している人・日本に留学経験がある人・他学部から転学した人・日本語専攻ではない人など実に様々なバックグラウンドを持つ人が集まるクラスであった。B1-2 といっても、各自興味のある分野や学習時間も異なるため B1-2 だからこの単語や文法は理解できると一概に言えないところが授業をしてみても難しいと感じた部分である。初回の授業では「授業をすることはどういうことか・雰囲気慣れる」ことを目標に授業を行った。授業の様子を担当教員の先生がビデオ撮影してくださったためそのビデオを見てから先生とフィードバックを行なった。授業中は進めることに精一杯だったため、冷静になってビデオを見ると、改善点が浮き彫りになった。授業の進行は学習者の協力も得ながらスムーズに進めることができたと思えば満足感を得ていた。しかし、ビデオを見ると反応があった学習者を見て安心して淡々と授業を進めていってしまっていた。授業で大切なことは教案どおりに進めるのではなく、学習者が理解しているか知識が定着しているかであるためこのところは学習者の反応を見て、適宜補足をするなどと柔軟に対応する必要があると感じた。授業中に学習者の反応があまりよくなかったところがあったのだが、授業中の私は学習者が知らない単語を聞いている質問だったのかなと考えていた。しかしビデオを見ると自身の問かけが曖昧なために学習者に答えてもらえなかったということが判明した。「積極的な人」の説明のところで、授業中手をあげている人のイラストを示して、「発言しようとしている・答えようとしている」という答えが欲しかったが、なかなか声が上がらなかった。ビデオを見ると「この人は今手をあげています。ここは教室です。何をしていますか」という質問をしていた。最初に手をあげていますと話したのに、何をしていますかという問かけでは学習者が回答に困るのも無理ないと反省した。そしてフィードバックを受け、迎えた二回目の授業では前回に比べ余裕を持って授業をすることができたと思う。手前に座っている反応のある学習者のペースで進んでしまった反省点も活かしてクラス全体を見たり、指名したりとクラス全体を巻き込めるようにした。最後まで悩んだ、トピック内の大きなタスクもグループワークでのやり取りを見る限り、活発に行われていたと思われる。

釜山外国語大学が取り入れている CEFR の Can-do の考え方は自分がこれまで受けたことのない考え方だったので、授業を作るときにとっても悩んだ。実際に授業をして感じたことは語彙数と文法のカバーに工夫が必要であることと場面設定の重要性である。教科書もなく指導単語が決められていないため、最終的な大きな課題のためにどれだけ単語や文法を積み重ねることができるかを感じた。指導する先生によって単語と文法のカバーの仕方は様々であった。CEFR の穴とも言えるこの問題について今後考えていきたいと思う。場面設定では実際に社会参加するものとして言語を使おうと学習者に思わせるのが大切であると感じた。例えばただ単に自己紹介をしようでは、学習者が使える簡単な表現にとどまってしまう。留学生歓迎会での挨拶などと場面を制限することで、話す内容の取捨選択や敬語などの適切な表現を考えて、より具体的で高レベルな自己紹介ができると思う。また、実用性がある場面を考えるのと同時に、導入の仕方や効果的なロールプレイの方法など様々な工夫ができると感じた。今回の実習では悩みに悩んで教案を考え、実際に授業をして学習者の反応を見て意図した通りに伝わったことに安堵したり、反省したりと長い時間クラスに向き合った。より良い授業のために教案をつくることは、終わりのない作業のように感じられるが、自分が考えた教案で授業をする楽しさも経験することができた。

3. 複言語・複文化プログラムについて

結論から述べて、自分では複言語・複文化能力を育むことができたと考える。その理由を3点述べたいと思う。

まず一つ目は、自分の中の言語の一つとして韓国語が身についたという実感があるからである。日本では、授業内という限られた空間でしか韓国語を使うことがなかったため、一つ一つの発言に慎重になっていたように思われる。しかし、韓国での生活では言語を使わないと、意思疎通ができなかったり、不利益を被る場合が多々あったため、完璧でなくても言語を使う必要性があった。そのようなサバイバル的な要因もありながら、コミュニケーションを通して会話の楽しさや韓国の人の温かさを感じることもできた。これまで、大学の授業や独学で韓国語を勉強してきた経験から、単に言語を学ぶだけでは、複言語・複文化能力は育まれないと考える。現地に行って言語を学んで、実際に使って現地の人とコミュニケーションを取ってこそ、複言語・複文化能力が育成されるだろう。その点でこのプログラムはとても意義のあるものだと考える。

二つ目は、韓国語を学び、そして日本語教育を行ったことで言語を学ぶ学習者の立場も理解することができた点である。韓国語研修では、日本語と韓国語の似ている点や異なる点を学ぶことができた。日本語教育実習で学習者の作文を添削したとき「～を乗る、～を好きだ」という韓国語話者ならではの間違いに遭遇した。私自身、韓国語を勉強するときこの助詞の使い方に違和感を感じたことがあるので、どうしてこの間違いが出るのか理解することができた。一方的に正しい文法を教えるのではなく、なぜこのような間違いが起きるのか理解していると、学習者の間違いにも冷静に対処することができると思う。日本語教師として相手の国の言語を知っているとつまづきやすいポイントが理解できるため、難しいと感じる学習者に寄り添った授業ができるのではないかと考える。また、直接法による授業では学習者が常に気を張って授業を聞いていなければいけなく負担が大きいと感じたので、できるだけ聞き取りやすいように大きな声で話すスピードも抑えるように心がけた。韓国語研修での自分の経験を、後半の教育実習に活かすことができたと考える。

三つ目は、日韓学生フォーラムで韓国の大学生と意見交換をして改めて日韓関係の問題の複雑さを感じた点である。韓国での生活の中で反日感情を全く感じなかったと述べたが、メディアではこれほど感じることもあった。韓国語研修のときに見たおそらく教育テレビ番組だと思われるのだが、小学校での出張授業のようなものが行われていた。その内容が日帝時代の安重根と伊藤博文に関するクイズで、韓国語の理解力がそこまで高くはないため全部を理解することができなかったが明らかに日本人からすると反日教育と思われるような内容であった。私はこれまで、歴史や領土問題はあるけれど学生の私たちは反日・反韓感情はないしこれから改善するだろうと思いついてばかりにとってもショックを感じてしまった。そこで日韓学生フォーラムで韓国の学生にこの話をして、歴史的な確執を持ち出すよりこれからはに向けて関係を構築することはできないのかと質問した。韓国の学生からは、自分も過去ばかり見るのではなく、これからはについてもっと時間を割くべきだと考えるという答えが返ってきた。もう一人の学生は、自分もそう思うが、おじいさんおばあさん世代では実際に経験したことだから主張を譲れない部分もあるだろうと話してくれた。1時間の議論の中で、韓国で見た番組を見て感じた疑問をぶついたり、韓国人の率直な日本のイメージを聞くことができた。私がフォーラムで感じたのは、反日・反韓感情はメディアの影響が大きいということ、そのためこのように議論する場を持ち続けることが大切だということだ。

自分の立場を主張するだけでなく、相手の主張に耳をかたむける姿勢を持ち続けることが今後の関係改善に必要なことであると考えている。

今回のプログラムでは、韓国語を学習し韓国の文化を体験し、韓国という国が自分のア

イデンティティの一部になったように感じた。また、日本語教育では今まで何気なく使っていた文法や言葉も客観的に見つめ直すことで日本人としての意識も再認識した。今、私の中には日本も韓国も互いに共存している。今後日韓人として自覚を持ち、両国のためにできることを模索していきたいと考える。

複言語・複文化主義の可能性

1. 韓国のことばと文化を学んで

私は韓国人であり韓国語を駆使することができたため、今回の多文化交流実習の韓国語プログラムには参加せず、後半の日本語実習のみの参加となった。韓国語研修には参加しなかったが、他の実習生と同じ日に韓国に行くことになった。韓国に帰国するのは4年ぶりで、久しぶりに親族や高校時代の友人と再会するなどして時間を過ごした。親族や友人との交流を通して、韓国人としてのアイデンティティを再認識することができた。

日本で生活するときには韓国語を使う機会が多くないため、単語や表現の仕方など忘れてしまっているものが多いことに気が付いた。そのため韓国語研修ではないが、韓国語能力を向上させるために、毎日新聞やニュースを見て韓国語に触れ、学んだ。

8月末には釜山外国語大学で韓国語研修を終えソウルに来た実習生たちと一緒に観光をして時間を過ごした。韓国で日本人の友人と会って交流することが初めての経験で、日本語で話しながら、時には簡単な韓国語を交え韓国の文化や歴史について話あったりしたため非常に新鮮であった。実習生たちとはソウルの北村韓屋村に行つて村を回ったり、食事をしたりして時間を過ごした。このような交流も複言語・複文化的な活動のひとつだと感じたため、この先も交流を図っていきたいと思った。

2. 日本語教育実習

後半の日本語教育実習には通常通り参加した。多くの学習者の前で日本語を教えることが初めてだったため、緊張と失敗の連続だったが、今回の日本語教育実習は、「教育」のことだけでなく、自分の素質や弱みについて多くのことを考え、学ぶことができた機会となった。

私が担当したクラスは B2-1 レベルで、「からだと健康」のトピックで教案を作成し4コマの授業を担当した。私を指導してくださった松浦先生は韓国に長期間在留されていて、韓国語や韓国のことについて精通している方だった。そのため、常に韓国人の学習者の視点に立って、どのように教えればうまく伝わるかを発音や語彙、表現の仕方など様々な側面から事細かく指導してくださった。

第一週目は松浦先生のご指導のもと教案を作成しながら、他の先生方の授業の見学をした。しかし、第一週目はオリエンテーション期間であり、教案作成に追われていて第一週目で通常授業を見学することができたのは「ビジネス日本語テキスト読み」と「日本語A1」のクラスのみであった。授業見学を通して気づいたことは、すべての授業で共通していたことだが、授業を始める前にアイスブレイキングの時間を取って、日本語を使って自由に会話させ、学習者だけでなく、先生を交えてクラス全体でコミュニケーションを図るということであった。日本語で自由に話し、コミュニケーションを図ることも授業の一環であるはずだが、私はその重要性を認識しておらず、与えられたトピックに必要な語彙、文法、表現だけを教えることだけに重点をおいて教案を作成してしまった。第二週目の月曜日と水曜日に実習を行ったが、初日の月曜日のクラスでは学習者との交流が少なく、一方的に教えるという形になってしまい、学習者が本当に理解することができたのかをきちんと確認することができずに終わってしまった。水曜日の最後の授業でコメントシートを書いてもらったが、月曜日の授業に関しては、学習者も同じことを感じており、非常に申し訳ない気持ちになった。松浦先生、森山先生のフィードバックを受けて、水曜日の授業

では、できる限り学習者とコミュニケーションを図り、学習者が学びやすい雰囲気、環境をつくろうと努力した。授業の最初にペアで自由に話す時間や学習者が日本語を使う時間を設けた。また、緊張すると表情が少し暗くなり、声が小さくなるというご指摘を受けたため、意識して笑顔をつくり大きな声が出せるように工夫した。教材に関しては、月曜日の授業前に、少しボリューミーだがうまく調整すれば時間通りに進められると言われていたが、授業の進め方が一方的であったため、時間が余ってしまった。そのため、学習者のアウトプットの時間を増やすことで時間をうまく調整できるよう心掛けた。

最後の授業では、教案の順序を間違えるなどのミスがあって、準備した通りにうまく授業を進めることができなかったが、月曜日の実習のフィードバックや先生方のご指摘を意識して教えることができた。学習者のコメントシートにもペアで話し合う時間が多かったことや授業の進め方に関して肯定的な評価が多かった。しかし、単語や表現の説明が難しいなどの指摘があって、外国人に日本語を日本語で教えることの難しさを改めて感じた。

2週間の日本語教育実習を通して、一から教案を作成し、自分で授業を進めるという経験をし、外国語として日本語を教えることだけでなく、単に何かを教えることの難しさ、授業を進めていくためのプロセスやそれを準備するために必要となる熱意や態度など、多くのことを感じた。閉会式での名古屋外国語大学の坂本先生のお言葉が非常に印象的で、今回の日本語教育実習を通して私が学んだこと、気づいたことをうまくまとめてくれたお言葉だった。教育の「教」は「教」ではなく「共」であるべきで、教師が一方的に教えるものでなく、教師と学習者が共に学んでいくべきであるというお言葉だった。この先、日本語だけでなく、他の言語を教えるような機会が訪れたとき、今回の実習で学んだことを活かしていきたい。

3. 複言語・複文化プログラムについて

今回の多文化交流実習は韓国語研修と日本語教育実習が一緒になっていて、日韓学生フォーラムもあり、日本語と韓国語両方を使って日本文化、韓国文化に触れ、交流を図ることができたため、複言語・複文化主義に基づいたプログラムであると感じた。

良かった点としては、まず日本語教育実習という単に日本語を教えるためだけに行くのではなく前半の韓国語研修のプログラムを通して韓国語や韓国の文化に触れ、理解を深めることができるため、日韓の学生が対等な立場で交流することにつながったことが挙げられる。日本人として日本語を教えに行くことは、日本人としてのアイデンティティを強化してしまう恐れがあるが、韓国語を学び、韓国人と交流する機会を事前に設けることで、より大きな枠組みの東アジア人としてのインターナショナルなアイデンティティを形成することができたのではないかと考える。

良くなかった点、プログラムでの釜山外国語大学のペアや日韓学生フォーラムに参加していた人たちの多くが日本語創意融合学部の学生で日本語を話せる人が多いことから、交流のなかで日本人学生が韓国語を使うことが少ないということが挙げられる。また、日韓学生フォーラムにおいても、もともと日本語や日本文化が好きな学生、日韓の歴史に興味を持っている学生が多く参加しており、ディスカッションの時に反論が出たり、異なる考え方をしている人の意見を聞いたりすることができなかった。日韓が抱える様々な問題を解決していくためにもより多様な意見や考え方を知ることが必要であると考え、日本語を専攻としている学生だけでなく、その他の専攻の人も参加してもらい意見交換をすることが望ましいのではないかと考える。

4. 残念だったこと

今回の実習で残念だったと思うことがひとつある。

私は釜山に親戚の家があったため、実習に行く前には親戚の家で生活する方が良いとばかり思っていた。しかし、日本語教育実習が始まる前に他の実習生とソウルと一緒に観光したり、ラインで連絡したりするなかで、同じ寮生活をすればもっと仲を深めることができるのではないかと思うようになった。日本語教育実習が始まってからは、お茶大生だけでなく他の大学生も同じ寮に住み、交流する機会も多かったと聞き、寮生活ができなかったことが少し残念だった。

複言語・複文化プログラムを終えて

1. 韓国のことばと文化を学んで

私が本格的に韓国語を学び始めたのは今年の春からで、今回の韓国語短期研修に参加するにあたり、研修が始まる前は韓国で生活することが非常に不安だった。海外経験は初めてではなかったが、前は渡航先の国や言語について事前に十分に学ぶ時間があったので不安よりも期待の方が大きかった。しかし今回は韓国の文化や言語の知識が不十分であると感じていたのが不安を煽った。自分の言動が韓国の方に失礼にあたりしないだろうか、誤解されたりしないだろうかとマイナスなことばかり考えた。日本語を学ぶ韓国人学生がバディとして付いてくれたが、その方とうまくコミュニケーションがとれるかどうかも不安で仕方がなかった。

しかし韓国に着いてみてまず感じたのは不安ではなかった。韓国語がわからない自分でも韓国での生活を楽しめるようなプログラムが多数準備され、そんな私たちをサポートしてくれる体制が万全だったからだ。バディの方、研修の運営を担当してくれる方々は日本語がペラペラで、とても親切に接してくれた。そんな環境の中であつたので、安心して自分のペースで韓国語を学ぶことができた。自分が振り分けられたクラスではクラスで話される韓国語がすべて理解できるわけではなく、自分には難しいと感じるクラスであつたが、少しでも韓国語の実力を伸ばしたかったのでクラスを変更することはしなかった。その結果、韓国語の上達を実感できるレベルまでいけたのでとても満足している。研修の初めに受けたプレースメントテストと最後のテストを比較してみると、点数も上昇し、何より達成感を自分で感じる事ができて非常に充実した研修だったと思う。

プログラムでは韓国語の勉強だけでなく様々な文化体験（韓服体験、韓国料理体験、韓国映画鑑賞、K-POP ダンス、韓国の歌の体験など）や釜山の地を思い切り満喫できる時間が用意されており、TV や教科書を通して見る韓国ではなく、実際の「韓国」を体験できたと思う。今年の前学期では韓国に関する授業を4つとったが、それらの授業で学んだことがその通りだなと実感した部分もあれば、想像とは違ったと思った部分も多々あった。例えば、グローバル化と言語教育Iの授業で私は「日本と同様に、韓国の若者は年配の方に比べると考え方が柔軟である」と感じた。政治や歴史上ではうまくやってきたとは決して言えない日本と韓国であるから、日本に対するマイナスイメージは若い世代よりも年配の方が高いのではないかと考えたためである。そのため韓国の年配の方に失礼ながらも少しだけ恐怖感を抱いていたのだが、地下鉄に乗っていたり道を歩いていた時に「どこの国の人？」と気軽に聞かれ、日本人だと答えても前と変わらず普通に接してくれたことが私には驚きであつたし非常に嬉しかった。「日本人のことを嫌っているだろう」という思い込みは自分の中にある偏見や固定観念であるとはわかってはいても、日本人である私に普通に接してくれることを経験して、マスメディアで報じられる韓国人と実際に韓国で生活している韓国人は違うのだと身を以て知ることができた。韓国を訪れる前に抱いていた不安が消えたこと、そして日本でももっと韓国について学びを深めたい、また韓国に行きたいと思うことができたことこそがこの研修が実りの多いものであつたことの証拠であると思う。

2. 日本語教育実習

日本語教育実習は韓国語短期研修よりももっと事前準備が足りなかったと実感した。そ

れは一緒に実習に参加した日本人学生が日本語教育を専攻とする大学生であったからというのものもあるかもしれないが、自分の気持ちに真剣さが足りなかった気がしたからである。どこかで「どうにかなるだろう」と思っていた部分があり、実習が始まった日にそのことを反省したことを今でも覚えている。韓国語の研修が遊びの時間だったと思えるくらい日本語教育はハードなスケジュールで睡眠も十分にはとれなかった。しかし自分で授業を考え、実践し、フィードバックをもらうというとても貴重な体験ができたことは自分の将来を考える上で非常に良い刺激になった。

渡韓前、日本語教育の授業や事前実習の場で少しは日本語教師のイメージがつかめたような気だったが、実際にやってみると何もかもが手探りで、とてもイメージ通りではなかった。授業を組み立てる立場に立ってみて、これまでの自分が受けてきた授業をもっと真面目に聞かなくてはいけなかったと反省した。学習者に少しでもわかりやすい説明ができないか、パワーポイント・プリントは見やすいか、単語の語彙レベルはクラスのレベルに合っているかなど気にかけることが多すぎて、一つの授業を考えるのにいったいどれだけの時間を費やしたかわからないほどであった。上級者レベルのクラスだったのでCan-do ステイトメントに沿ってさえいればほとんど自由に組み立てられたが、テーマ設定にとっても時間がかかった。A-1 や A-2 は教えること（カタカナやひらがななど）が大体は決まっているので、どうやって説明したら学習者が理解しやすいかに重点を置いていたようだが、上級クラスになると授業の内容に重点を置いていたように見えた。学ぶことと実践することの違いは異文化理解という点にも当てはまるが、日本語を知っていることと日本語を教えることが違うということを実感する機会でもあった。インプット（大学での学びなど）に比べて、アウトプット（実践）がどれだけ大変かを改めて感じる事ができた。日本語教育も教育実習も全てが初めてで出来上がった授業も拙いものであったが、いろいろ工夫しながら授業をするというのはとても楽しく、充実感もあった。担当教員の諏訪先生も様々なサポートをしてくださったが、最初に会った時に「楽しみながらやりましょう」と声をかけてくれたことが大きかったように思う。付け焼き刃の知識では限界があることは目に見えているが、それでも全力で取り組みかつ自分が楽しいと思える、韓国の学習者から学ぶという姿勢で授業に臨めたこの2週間はとても貴重な体験であった。

3. 複言語・複文化プログラムについて

複文化の点においては実感を伴った異文化理解ができたのではないと思う。お茶大で行うTV会議授業とはまた違う「韓国」を知ることができた。日韓学生フォーラムでは実際にお話することができてとても勉強になったし自分の韓国への理解が足りないと感じ、新たな課題も見つけることができた。この点は非常に良かったと思うが、6週間を通して韓国語に触れる機会は少なかったように思えるので複言語の点では残念さが残る。これでは韓国語を全く知らなくても、助けてもらいながらただ過ごすことができるような気がした。私たち日本人学生の韓国語能力の問題であるが、韓国と日本の間の難しい問題について日韓学生フォーラムでディスカッションするときに韓国側が日本語で話してくれることが当たり前ようになっていた。だがよく考えればこれは平等ではないような気がしてならない。円滑なコミュニケーションを大切にすれば日本語でしたほうが効率がいいのかもしれないが、日本側の歩み寄りが少し足りないのではないかと感じた。来年からはプログラムの募集をする際に韓国語能力も問うたほうが良いのではないと思う。

しかしこのプログラム全体に私はとても満足である。実感を伴った学びというのは自分の中に強い印象を残し、これからの自分の学びへの刺激になる。韓国についての関心がより一層深まり、「もっと知りたい」「なぜそう考えるのか」と思うことが増えた。韓国語学習への意欲も高まり、韓国で働いてみたいと感じたほどである。自分のアイデンティティ

の変化とまで言えるかどうかはわからないが、二国間の距離がもっと縮まってもっとお互いを助け合えるような存在になってほしいと強く感じるようになった。お互いの国への偏見を捨て、より良い信頼関係を築き、政府同士が協働できるような将来が来ることを祈った。「そのために自分ができることは何か」という問いは私には難しいが、最低限できることはこのプログラムを通してできた韓国とのつながりを大切にすることだと思う。私一人でできることには限りがあり、日本人のつながりはこれからいくらでも作れる。韓国と繋がれたことがこのプログラムの一番の収穫である。反対にこのプログラムの限界は、せっかく韓国の大学にいたのに多くの学生と話すことができなかった点であると思う。日程上仕方がないことだが夏休み中はバディの方としか話さない。新学期になれば日本語教育実習に追われるので、本当に日韓学生フォーラムとその後の食事会くらいしか多くの方と話す機会がなくて少し残念だった。対話はとても大切だと実感したので、新学期が始まってからこのような機会がもう少しあれば良かったように思う。

4. グローバル化と言語教育 I について

日韓学生フォーラムで前期の授業を取っていた学生さんと再会したこと、担当教員が諏訪先生だったということもあり、少し前期の授業を振り返る機会があった。私はTV会議の授業の限界として日本語での発表だったことを挙げ、それに対する改善策として英語を使ってはどうかと提案した。しかしそれは韓国側に全く配慮していない意見だったことに彼らと話をしていた気づいた。日本語を外国語として学んでいる韓国の方に対して、自分の都合の良い言語を押し付けるのはとても失礼であった。反省している。この間違いを踏まえて、後期のTV会議の授業ではこれの代替案が見つかることを含めて、もっと前向きなディスカッションが展開されることを期待している。

韓国での実習を終えて

1. 韓国のことばと文化を学んで

まず、韓国語について述べる。私は大学で第二言語として韓国語を選び、1年半学んできた。そのため文法はおおよそ学び終えており、今回の実習は学んだ知識を実践する機会だと考えていた。今、それはとても呑気な考えだったと思う。韓国に来て私は、文法を知っていることと実際に使いこなすことは大きく異なるということをいたるところで痛感することになった。パートナーがいたときはほぼ韓国語を使わず、スムーズに買い物や生活をしてきた。しかし、日本語ができる人がいなくなった途端、全てのことでうまく立ち行かなくなった。電車の中で話しかけられてもわからない、お店の人の問いかけに答えられない。自分の思いは日本語の中で形作られており、とっさに韓国語や英語に変換することにつまずいてしまうことが何度もあった。言葉が通じないという経験は初めてで、伝えることのできないもどかしさ、苦しさを思い知った。しかし、まっすぐ伝えることができないなかで気づいたことがある。カフェで注文の仕方を教えてくれた店員さんや郵便局で通訳してくれたお客さんにとって、手間をかけさせた私は迷惑だったかもしれない。しかし、自分が迷惑をかけると閉じこもっては何もできなかった。ここで勇気を出して伝えようとしたことで相手が私の意を汲み取ろうと歩み寄ってくれたことを強く感じた。韓国の方はとても優しく対応してくれ、そうした人の心の温かさにも触れることができた。日本にはわからない、「伝える」ことの本当の重みを知ったのが今回韓国語を使うなかで得た、最も大きな「学び」だったと思う。韓国語学習が中途半端な状態で行ったからこそこの気づきであり、韓国語学習に対するモチベーションを大きくあげるきっかけになった。今回は日本語で話したパートナーたちと、お店の店員さんや電車であ会った人々と、次回こそは韓国語で積極的に話しかけるということが今後の目標である。

次は文化について述べていく。文化は私が一番興味のある分野であり、文化の違いを知ることが留学前の大きな目的でもあった。飛行機から韓国の釜山の先が見えてきた時点で既に日本にはない高さの建物が整然と並ぶ姿を見て、違う文化があることに期待を抱いた。ところが実際降り立つとほぼ日本と変わらない気候や自然、そして文化がある。私は韓国も日本も東アジアの同じような自然の中で似た文化が育まれてきたことを知った。しかし、生活を続けると小さな違いが次々と見つかり居心地の悪さを感じるようになった。辛い食事はもちろんだが、どこでもステンレスの食器を使うこと、直接箸を大皿につけること、シャワーしかないこと、ゴミを道端に捨てることなど、文化が似ているだけにこうした小さな違いが余計気になる。文化の違いを知ることはたやすくても、実際受け入れるのには抵抗を感じてしまい、ストレスに思うこともあった。今まで大学で学問として学んできた異文化理解だが、改めて異文化を目の当たりにしてみると、それがいかに困難なことかに気づいた。1ヶ月以上、韓国に滞在する中で徐々に私も韓国の文化に慣れ、最初の頃の高揚感やストレスはなくなり、同時に日本の文化に対する様々な見方が生まれた。外国人という立場に置かれ、日本と韓国のどちらに属することのない存在になり、お互いの文化に対して客観的な視点を持つことができるようになったと思う。日韓関係についても自分なりの認識を得られ、課題が見えてきた。自分がこれまで学んできた知識に加え、今回経験してきたことを総合して、韓国は私のなかで最も近い国になった。これからは韓国をさらに知っていくことだけではなく、得たことを活かして自らが日韓の架け橋となるために

きることを学んでいこうと思う。

2. 日本語教育実習

私はこの実習の中で日本語教育実習を最も不安に感じていた。日本語教育は4ヶ月授業で学んだが、教壇実習の経験もなく全く初めての経験になる。普段学生である私が教師として教えることが想像できなかった。前半の韓国語実習が終わってすぐ担当教師の方と面談をし、教案に取りかかったが、まず学生が日本語・日本文化の何を知りたいのかということから考えなければならなかった。特に私は最上級のB2-2クラスを担当していたため文法事項を教えるより、将来日本に留学したり、就職したりと長期滞在する人達に対して必要な知識を探し出す必要がある。そのためむしろ、日本語というより日本文化を考え直すことになった。ただ、外国人によく知られている日本ではなく、また数多くある韓国と共通した文化ではない部分で日本を教えるのは日本人の私にも難しかった。何度もテーマを練り直し、結局曖昧な日本語、日本の自然・文化と手紙というテーマに落ち着いたのだが、納得いかない部分もあった状態でぎりぎり授業に間に合わせた。教壇では人前に立つことに大いに緊張したが、2回とも筋書き通りには終わることができた。しかし後悔している点が多い。特に学生からの質問や問いかけをあまり引き出せなかったことやせっかくなら聞いてくれた質問にうまく答えられなかったことだ。できることならもっと時間をとって活発な話のやりとりをしたかった。日本語教育実習は日本語教師になる人にはとても有効な時間だっただろう。しかし、もっと関わりを持ちたかった私には少し物足りない感じで終わってしまったのが残念だ。

だが、日本語を学んでいる学生の姿を見たことは大きな刺激になった。最上級のクラスの人たちの日本語・日本を知りたいという強い思い、熱心に勉強する姿勢に私は感動した。私は韓国語を選び、学んでいるが、自分の専門分野ではないと手を抜いてしまうこともあった。たとえ専門ではなくても、言語はすべての基本になる。そして彼らと交流を持つのに大切なツールだ。帰国後はもっと韓国語、そして英語も真剣に取り組もうという決意を固め、修了証を受け取った。初めての体験だったが、今では本当に挑戦してよかったと思っている。

3. 複言語・複文化プログラムについて

日韓学生フォーラムについては充実した時間だったと思っている。短い時間だったが、日韓の問題について直接韓国の方と話し合えたことで様々な視点を得ることができた。今後授業の中でお互いに学びを深めていきたいと思う。

全体に関して、韓国語、そして日本語の両方に触れ、さらに日本に興味を持つ韓国の学生と多くの関わりを持たたという経験はこのプログラムに参加したからこそ得られたものだった。特に韓国が自分にとって一つの外国ではなくなり強いつながりのある場所になったことが嬉しかった。1ヶ月以上という長い滞在の中で韓国文化への認識の変化を感じ、同じ学生同士の交流を通して日韓の共生を前向きに考えられるようになった。ただし複言語・複文化プログラムという観点でいうと、言語の面で少し物足りない点もあった。前半の実習は韓国語の授業や文化体験は充実していたが、日常生活においてはほぼパートナーに頼る形であり、そのためあまり韓国語を使用せずに過ごすことができた。もっと積極的に韓国語を話すようにすればよかったと後悔しているが、レベルも色々なのでパートナーは全員と話すために日本語を使う必要があったのだと思う。また、後半の日本語教育実習はさらに日本語のみになってしまったので、覚えた韓国語を使う機会はなかった。また、日韓・東アジアの共生について考える機会もフォーラム以外にはあまりなかったと言える。交流においては政治の話はほとんどなく、学生の方も元々日本や日本語が好きで日本語学

科をとっていることもあり、そうした方向にはならなかった。総合してみるとこのプログラムは日韓の文化への理解や韓国の学生との交流を深める素晴らしい体験を提供してくれたが、言語面では韓国の学生に頼ることがほとんどで、日韓の共生への具体的なビジョンまで思い描くのは難しかった。私たちが日本語を学生に教えたのと同じように韓国の学生から韓国語を教わる機会があればより双方の言語における交流ができたのではなかっただろうか。また日韓・東アジアの共生についてももう少し長い時間をかけて取り組みたかった。しかし、韓国に滞在し、このプログラムをやり遂げたことで、自分の知識の足りない部分のはっきりとし今後の学習に繋げていくきっかけを手にした。2年生の今だからこそ、このプログラムに参加した価値があったと思う。

4. その他

韓国に来て、一つ気になった点がある。それは歴史的建造物が少ないことだ。私は慶州に行き仏国寺を観光し、ソウルで景福宮や北村韓屋通りなどに行ったが、当時の姿を保っておらず再建したものもあった。(もちろん韓屋をモデルにした新しい建物は多くあり、とても美しかった。) また、伝統的なお祭りなどはほとんど聞かない。お土産屋で伝統工芸や韓服をモチーフにしたものもあったが、日本に比べれば少ないと思った。一方で韓国料理店の多さには驚かされた。普段から韓国料理を好んで食べ、朝食にもキムチなど辛いものが多かった。それは日本が韓国を占領したことが原因だったのではないだろうか。韓国文化が抑圧されたことで歴史的建造物は取り壊され、お祭りなどの習慣がなくなったのではと私は考えている。一方、人々の間で継承される食の文化は今も色濃く残り、韓国料理は韓国人にとってのアイデンティティになったのかもしれない。このことは私の推測に過ぎないが、そうしたところに韓国が辿って来た過去を感じた。

今の韓国は新たに作り出した現代文化が広まっている。若者達はメイクをし、流行のファッションでデパートを歩く。日本と同じようだが、日本よりもさらに未来志向が強い感じがする。しかし過去を捨てたわけではなく、人々は常に日本に訴えかけている。過去を忘れるなど。この実習ではあまり日韓関係のもつれや戦争の記憶を感じさせるような経験はなく、日本人の私に皆とても優しく接してくれた。交流を深めていくのに過去の出来事を持ち出すのはよくない、新たに関係を作り出していけばいいとも思った。だが、戦争を知らない若者も自分の祖父母を見て傷ついた経験を抱えているはずだ。これから日韓が一歩進むにはやはり過去を見つめ直す必要がある。その上でどこかに区切りをつけなければいけないとも思う。今回韓国でこの日韓の停滞している関係を変えたいと思っている人たちにたくさん出会った。だからこそきちんと両者が納得いく合意、区切りを形にし、交流が活発になっていくためにさらなる努力が必要だ。1年半、私は授業や自分なりに韓国について学習し、そして今回実際に韓国を見てきた。学んできたことをそろそろ実行に移していきたい。自分の専門にするかはわからないが、たとえ専門にしなくても日韓関係を憂う一人としてできることをしようと思う。

研修を通して感じた日韓の関係

1. 韓国のことばと文化を学んで

前半のプログラムを始める前、私は、韓国語の能力が乏しかった。3週間の韓国語学習の授業では、基礎から学ぶことになった。授業の具体的な内容としては、初めにハングルの読み方ときれいな発音の仕方を学び、その後、様々な日常での場面の会話を学びつつ、その場面に出て来る文法を徐々に学んでいくというものであった。場面は、自己紹介や家族紹介、自分の家の紹介など、簡単な単語も同時に学べるようなものであった。発言する機会が多く、積極的に参加する形の授業だった。アクティビティが多かったため、実際に体で言葉を覚えていくことができたのがとても良かった。聞くだけの授業では、理解が定着しないままであったと考える。授業中の先生方は、ほぼ韓国語だけで授業や意思疎通を行っていた。韓国語がまったくわからない私たちが先生の言っていることがわかったのは、先生が大きいBody Languageを使用していたことが大きな理由だった。Body Languageは万国共通であることを実感したし、後半のプログラムである日本語教育実習の際に自分が気をつけるべきところだと考えさせられた。

このような3週間の授業を通して、ハングルを読むスピードが格段に上がったり、簡単な単語の意味がわかるようになったりした。最初は、人々が話す言葉や、公衆で目にする放送などの言葉が雑音にしか思えなかったが、3週を終えると、所々ではあるが、わかる単語を聞き取ったりすることができるようになった。私の場合、3週間で急激に韓国語への理解が変わったので、歩いている世界がまったく違うように思えた。同じ歩いた道でも、3週間プログラムの前と後では、まったく違う道を歩いているようだった。道端にある看板の文字や人が話している言葉が少しでもわかることでこんなにも感覚が違うのかと実感した。言語の重要性を実際に自分を通して学びなおせた。

また、この3週間において、釜山外国語大学の生徒のバディと行動を共にしたが、韓国の文化や生活も同時にバディ達から学んだ。器を持って食べないというご飯の食べ方の違いや、日本人と韓国人の電車内での行動の違いなどをバディ達に教えてもらった。バディ達は日本語が得意で、一緒に行動しているときは日本語で会話をしていたが、その流暢さにも圧倒され、韓国語を自分も負けないように勉強しようという刺激にもなった。また、バディが近代歴史資料館に連れて行ってくれた際に、私は大きな経験をした。そのスタッフである女性から日本語で、『今の日本人は自分たちが朝鮮で起こした残虐なことを何も知らないし、わかろうともしていない。』というようなことを言われたのである。確かに、その歴史資料館にあった資料ではとても残虐なことが書かれていたし、それは世界史の教科書にも載っていないことであった。知っているつもりではあったのに、知らないことも多く、その女性に私は何も言えなかった。ただ、日本人全員がそうではないということを知ることができたが、その時は圧倒されてしまい、何もできなかった。しかし、今考えてもこの時に自分が何をすべきだったのかははっきりと答えが出ない。実際にこういう場面に遭遇したのも、今後自分がこのような韓国と日本の溝のようなものに対してなにができるかを改めて考えさせてくれるような良い経験であった。これからの課題にしたいと考える。

次に韓国での生活だが、これは特に日本と大差ないものであった。食生活に困るかと考えていたが、白米が同じように食べられるため、全体的に食べ物が辛いことを除けば、食生活にも不満はなかった。ただ、大差がないと、些細なマナーもあまり変わらないのではないかと考えてしまいがちであった。実際は、日本人とかなり異なるマナーが多く、先ほ

ど述べたバディ達に教えてもらわなければ気づかなかった。

この3週間のプログラムにより、韓国の生活や文化に実際に触れることができた。同じアジアで隣国の国であったとしても、文化や考えが大きく変わってくるにより興味を持った。

2. 日本語教育実習

後半の日本語教育実習のプログラムでは、50分×2コマの授業を2日間行なった。最初の週は釜山外大の様々な日本語の先生の授業を見学した。実際に授業を聞くときに自分が教える立場であるということを踏まえながら聞くのは初めての経験であり、様々なことを学んだ。具体的に述べると、私はA-1からB-2-2の全てのレベルの授業を見学したが、レベルによって先生方は話す速度や使う単語、授業中に用いる韓国語を微妙に変えていた。自分のレベルであるB1-1の生徒の大体のレベルや授業中の言葉の使い方などをそこで学ぶことができた。

このように、先生の授業を見つつ、次の週の自分の授業に備えて教案や授業で使うPPTを準備したのだが、教案作成が一番苦労した。まず、Can Doという形式の授業が日本ではあまり見られなく、自分もそのような形の授業を受けたことがなかったため、事前指導の教科書でしかCan Doについて知ることができなかった。そのため、実際に自分がどのような授業を行うかなどが明確に想像がしにくく、教案の書き出しに苦労をした。このことから、実際に事前授業でも、よりしっかりとした教案を作成し、模擬授業をすべきだと反省をした。また、指導教員によって教案作成の仕方が大きく違ったため自分の中で混乱を起こしてしまった。

次に授業内容についてだが、私は主にアクティビティを多く取り入れるように授業をしようと考えた。なぜなら、インプットも大事だが、実際にアウトプットが多い方が生徒が積極的に参加できる授業になると考えたからだ。そのアクティビティで何をするかというのを考える段階で、自分の経験不足を痛感した。私の授業のトピックは『住まいと住環境』であったのだが、アウトプットのアクティビティをする際に、生徒が一番身近に起こりそうな場面を思い浮かべることが難しく、アクティビティに偏りが出てしまった。一番最初に提出した教案では、あまり起こらなさそうな場面でも、なおかつ、やりとりと表現のアクティビティが似通ってしまっていた。指導教員から、このアクティビティをして生徒達は何ができるようになるのかという指摘を受け、Can Doに自分の教案が沿いきれていないことに気づかされた。自分がCan Doに沿っていると思っていても長年受けてきた教育に左右されており、教育の影響の強さを感じた。そこで、より教壇へ立つことの緊張感が高まった。これは私にとってとても良い刺激となり、自分の授業の実習の始まる直前の時間まで手を抜かずに、流れを確認したり、プリントの確認をしたりした。それでも、教壇に立つと予想外の問題に遭遇し、どれだけ冷静に対処できるかが鍵となった。ただ、入念に準備をしていたおかげで焦らずに問題を対処できたと考える。例えば、時間が余ったときに使うプリントやアクティビティを用意した。これは、実際に時間が15分ほど余ってしまったときに使えたので良い対策だったと言える。入念な準備の重要性を再認識した。

教壇実習は人生で初めてのことで力不足な面も多々あったが、実際の教育現場を知ることができ、とても貴重な経験になった。

3. 複言語・複文化プログラムについて

このプログラムの良かった点は、言語を学ぶ立場と教える立場、両方を短期間に経験できることだと考える。実際に、自分が前半の韓国の言葉と文化を学ぶプログラムがあったからこそ、後半で教えることができた日本文化もあった。両方の立場を自分の中に立てる

ことで今まで見ていた言語教育を違った視点で見ることができるようになったのである。また、日本と韓国、お互いがお互いをどう見ているか、見られているかについてより知ることができた点が良かったと考える。これは、実際に政治問題なども日韓学生フォーラムを通じて話せたことで、単なる語学留学だけでは得られないものも得ることができた。

次に、良くなかった点としては、実際に接触した韓国の大学生は全員日本が好きであるということである。日韓学生フォーラムで韓国の学生と話した時に、自分たちは日本が好きで、反日感情がないが、日本が嫌いでよく悪口を言う学生もいると言っていた。確かに、大きな反日感情を持っていればそもそも日本人の研修生である私たちとは交流すらしてくれないだろう。逆も然りである。もし、嫌韓感情が強ければこのプログラム自体に申し込まないであろう。しかし、実際に日韓・東アジアの共生のためには反日嫌韓の感情を持つ人たちとも話すべきであると考え。今回のプログラムでは、そのような機会がなかったが、偶然あった「1. 韓国のことばと文化を学んで」で述べたような日本人に対して良い感情を持たない女性との会話によって、私の中でこのプログラムが互いの文化や政治に触れて理解が深まったプログラムでは終わらずに、より考えることが増えたものになった。共生のためには反日・嫌韓の人たちとも話すべきである。これを実現しようと考えたと難しいものであるが、日韓の溝が生まれた原因が起こった世代から変わった世代から率先して交流をするべきであると考え。また、それにはどちらかの言語に合わせて話すのではなく、お互いがお互いの言語を同じように理解しているとより良い話生まれるのではないかと考える。

韓国から見た「韓国」～東アジア共生のために～

1. 韓国のことばと文化を学んで

8月7日から8月26日に開催された韓国語短期研修では、韓国語の授業を受けたり、釜山の主要な観光地を巡ったり、釜山外大の学生がパートナーとなって交流してくれたり、とても充実した楽しい時間を過ごすことができた。この研修の中で様々な体験をした私は韓国のことばを学び、韓国への理解を深めることができた。

私はこのプログラムに参加する前までは、韓国についての知識はなく、韓国の代表的な料理も、人気アイドルも、有名なコスメも全く知らなかった。私が知っていたのは学校の教科書やメディアの報道による情報のみで作りに上げられた「韓国」であり、どちらかといえば韓国に対してネガティブなイメージさえ抱いていた。しかし、なんとなく参加してみたこのプログラムを通して韓国の様々な良さに気づくことができ、韓国のことが本当に好きになり、また韓国に足を運びたいと思うようになった。

プログラム中に8月15日を迎えた。8月15日は私たち日本人にとって終戦記念日である。敗戦国である日本では全国戦没者追悼式が厳かな雰囲気で行われる。しかし、その日の韓国では街中のいたるところに韓国の国旗が揚げられており、8月15日の捉え方は日本と韓国で全く異なることに気がついた。8月15日は日本が降伏した日であり、韓国にとって36年間に及ぶ日本の支配からの解放の日である。「戦争終結」というたった一つの出来事、その一日を切り取ってみても、国や立場が違えば捉え方は全く異なるということをもって実感した日となった。

他言語を習得するにあたり、自己の変化を感じられることがあるという。しかしながら、私は今回のプログラムを通して自己の変化を感じるほど韓国語を深く習得することは残念ながらできなかった。このプログラムを通して関わった韓国の学生は日本語がとても流暢であったため、今回のプログラム中での学生との交流はほとんど日本語を使ってしまった。しかしこのプログラム中私の頭の中には常に「複言語・複文化主義」という考え方があった。日本語だけの交流では全く、複言語・複文化主義を体現していないのではないかと感じた私はとても情けない気持ちになっていた。過去の私であればこの出来事に対して何も感じなかったであろう。帰国して見て、プログラム中に情けないという感情を抱いたということは少しでも複言語・複文化主義を理解し、体現しようと試みているという自分の成長を感じることができた。

このプログラムを作り上げてくれた韓国のスタッフの方々が、このプログラムを少しでも良くしようとどんな時でも動いていたことに感動し、3週間という短い期間の中でたくさんの人と出会い、たくさん思い出ができた。正直、たった3週間ではパートナーとそこまで仲良くなれないだろうと思っていた。しかし、パートナーと離れたくない、日本に帰りたいと空港で互いに涙を流すほどに絆を深めることができた。問題の多い日韓関係ではあるが個人の交流では日本人、韓国人は関係がないことを再確認し、本当の「韓国」を少しでも知ることができたことは良かったと思うと同時に、このような交流の機会が多くなれば双方の理解が少し進むのではないかと感じた。

2. 日本語教育実習

私は今まで人に何かを教えるという経験を全くしてこなかった。そのためこの日本語教育実習は苦労も多く、楽しいことばかりではなかった。しかしながら苦労の中にも楽しさ

を見つけ、また多くのことを学ぶことができた。

まず、釜山外大の先生の授業を見学した。そこで感じたことは、先生一人一人によってアプローチが全く異なるということだ。can-do というのはもともと授業の目標のみが与えられていて、アプローチは教員によって異なるというものではあるが、見学を通して改めてアプローチの違いを感じた。使用する教材も授業の進め方も成績の評価方法も話すスピードも語彙のレベルも全てが一人一人の先生によって違っていた。同じレベルかつ同じトピックでもそれぞれの先生にそれぞれのやり方があった。それに伴い、当たり前のことではあるが、教室の雰囲気や学生のレベルも様々であった。したがってこの can-do に沿って行う教育では先生の独創性が大いに必要であり、先生自身の能力が高く求められると感じた。また、日本語教育、言語教育においては学習者のレベルに合わせて先生は話すスピードや語彙のレベルを考えるべきであるという常識があるが、スピード調整や語彙コントロールを厳密に行っている先生は誰一人としていなかった。やはり大学の講義で学んだ常識は実際の教育現場では常識ではないということがある。実際の授業を見学する大切さに改めて気付かされた。

「日本語を教えてあげようという考えを持って授業をすると必ず失敗するし、誰も楽しくない。授業をすることによって自分も学び、楽しもうとする姿勢が大切だ。」これは、私の担当教員が初めての面談のときに私に言った言葉である。私はこの言葉を実習中に何度も自分に言い聞かせながら授業に臨んだ。実際に授業を行ってみると、この言葉の大切さが本当によくわかった。教えてあげようという気持ちで授業を進めると、学生とのコミュニケーションは少なくなり、先生の一方的な授業となってしまう。一緒に学ぼうという姿勢を先生が見せて初めて、学生もこの先生から学ぼうと思えるのである。

また、私は今回の実習で授業に使う教材を一から作成した。授業の理解の段階においては聞き取りを行ったが、インターネットに掲載されてある記事の文章では難しすぎるため、自分で内容を選択肢、語彙のレベルや文章の長さを調整して聞き取りの文章を作成した。また、やりとりの際に使うイラストや表現の際に行うスピーチの例も自分で作成した。もちろん、授業で学生に配るプリントやパワーポイントも全て自作であった。授業の内容を考えたり、教案を作成したりすることも大変であったが、今回はこの教材作りに多くの時間と労力がかかった。しかし、自作の教材を使って授業を行い、その授業が成功した時の達成感にははかりしれないものであった。また、私の作った教材を担当教員の先生が大変気に入ってくださり、別のクラスで使用していただいたことは私の大きな自信となった。can-do においては、使用する教材が全く決まっていないために、自分で教材を作成することも可能である。私は今回の実習を通して教材を一から作成する喜びも感じることもできた。

今回の実習を通して日本語教師としての今後の課題を発見することもできた。今後の課題は授業中の学生の発言、発表に対するフィードバックである。「授業中に学生に発言をさせたなら、その発言に対して必ずコメントをするべきである。学生の発言に触れてあげないと、発言をした学生は二度と発言をしたいと思いますなくなってしまいます。」この言葉を私は日本語教育実習が2回目の先輩に言われた。この言葉を聞いたときは学生の発言に対して先生がコメントするのは当たり前のことでそこまで注意すべき点ではないと感じていた。しかし、実際の授業で学生の発言や発表に対してコメントすることは非常に難しかった。1回目の授業では、ペアごとにやりとりの発表をしてもらった。しかし、やりとりの中で間違った表現を発見してもその場で間違いを指摘して解説することができなかった。また、発表に対してよかった点を見つけ、褒めてあげることもできなかった。どのように発言、発表をしていくかわからないため、その場で対応しなくてはならない。2回目の授業ではスピーチの発表に対しできる限りフィードバックを心がけたが、担当教員にはフィードバ

ックの不足を指摘されてしまった。学生の発言、発表に対するフィードバックは教師になる上で必要不可欠なことであるが、何よりも難しいのではないかと感じた。

実習中には担当教員や先輩、大学の教授に厳しい言葉を言われ、心が折れそうになったり、授業の準備が思うように進まず睡眠時間を削って準備をしたりと大変なことが多くあったが、授業後はなんとも言い難い達成感で満ち溢れていた。日本語が大好きで、日本語を学ぶ意欲がある釜山外大の学生に授業をすることができたことは、私にとって大変有意義な体験になったことは間違いない。大学入学前には日本語教師というものに興味がなかったが、この実習を通して私の人生の選択肢の一つとなったと言えるだろう。

3. 複言語・複文化プログラムについて

今回6週間というプログラムの中で、韓国のことばと文化を学び、日本のことばと文化を教えるという複言語・複文化主義を体現したような体験をすることができた。2つの相互的なプログラムに参加したのは本学の学生のみであり、他の大学の学生はどちらか一方のプログラムへの参加であった。またプログラムを主催している釜山外大も2つのプログラムを別のものとして捉えており、プログラムに関わっている責任者、学生は異なっていた。つまり、2つのプログラムを相互的に捉えているのは本学だけである。私はそこに本プログラムの限界を感じた。2つのプログラムを融合してはいるものの、1週間の間が空くことや、プログラムの関係者が異なることから2つの別々のプログラムに参加しているような感覚を覚え、相互的なプログラムであると感じることができなかった。私は、韓国と日本の双方の大学が6週間を一つのプログラムとして捉え共通の認識、目標の下で実施すべきであると考えている。また、本プログラムに参加している韓国側の学生は釜山外大の日本語創意融合学部に所属している、少なからず日本に興味を持っている立場の学生である。もちろんそのような学生は日本の学生との交流に積極的であり、日本に対してネガティブなイメージを持っていない。日本が好きな韓国の学生と韓国が好きな日本の学生だけで交流を深めるだけでは問題の根本的解決にはならないと考える。本当に必要であるのは日本に対して好意的な印象を持っていない学生との交流ではないか。

日本から知ることのできる韓国はテレビや新聞などのメディアを通して報道される「韓国」のみである。日本語におこされる際にバイアスがかけられていることは間違いないが、そうして知る「韓国」には慰安婦問題や強制徴用問題が絡んだネガティブなイメージである。ここ数年における日韓関係の冷え込みは著しく、日本から見る「韓国」ではなく韓国から「韓国」を見るということも本プログラムへの参加を決めた理由の一つである。「韓国」を見るために私はプログラムの休みを使いソウルを訪れたが、周りには日本人が多く東京と変わらない雰囲気であると感じた。また交流を行った韓国の方との間にわだかまりはなく、文化レベルでの交流は進んでいるのではないかと考える。しかしながら国交レベルでの相互理解には程遠く、問題が山積みである。本レポート作成中に平昌オリンピック公式ホームページ上に日本が消されている世界地図が掲載されているという問題が発生した。平和の祭典でありながらこのような問題が生じてしまったことは非常に悲しい。私は隣国である韓国との関係性の改善を望んでいるが、それにはまだ時間が必要であると感じる。

日韓関係の向上及び東アジアの共生のためには国政の協力は必要不可欠であるが、私たちのような若者や学生ができること、むしろ我々の世代にしかできないこともあると考える。まずは戦時中に日本が東アジア諸国に行った過ちをしっかりと理解することである。その際は日本の文献のみならず他国からの視点のものを取り入れていくことが必要である。戦争を経験していない我々の世代だからこそ、歴史的事実を冷静に見つめ、純粋な気持ちを持って日韓関係の向上に向けて交流を深めていけるのではないかと考える。

我々若い世代が今回のような双方の文化理解の機会を多くもつことこそが国際関係改善

の一助となるものと私は確信をしている。

4. 結び

本プログラムに参加するにあたりご指導いただいた森山先生、佐々木先生にこの場をお借りいたしまして感謝申し上げます。またご支援をいただいた日本学生支援機構、最後に企画運営を行っていただいた釜山外国語大学校、お茶の水女子大学に感謝申し上げます。

釜山外国語大学での研修について

1. 韓国のことばと文化を学んで

前半のプログラムでは、3週間に渡って午前中は韓国語の授業、午後は釜山市内観光、というスケジュールで活動しました。日本人学生と韓国人パートナーで団体移動し、全員でバスに乗ったりパートナーが率いるグループ毎に遊びに行ったりしたので、自分が観光ガイドブックでは調べなかった場所や、多少遠いと思った場所にも行くことができてとても充実していました。韓国人1人に対し、日本人3～5人で様々な観光名所を回って買い物をしたり食事をしたり、親睦を深められる良い機会となりました。

韓国の文化に関しては、日本と時間感覚やコミュニケーションスタイル、街の雰囲気も似ており、生活そのものは概して日本とあまり変わらないように思いました。ただ、韓国人は自国の文化に大きな誇りを持っているのではないかと感じる機会が多かったです。私自身が感じたものを3点挙げますと、まずは街中に流れる音楽です。街や店で流れる音楽は、ほとんどが新しくリリースされた K-pop であつたと思います。私はふと、日本では街中でこんなに多く J-pop が流れているだろうか、と思いました。日本では、例えば多くのアパレルショップでは洋楽が流れていて日本の曲が流れることは少ないですが、韓国では洋楽はほとんど耳にはせず、K-pop が目立ちました。日本と韓国、双方の流行りの音楽のテイストの違いもあると思いますが、韓国人は韓国の曲が大好きなのだ、という印象を受けました。次に、韓国料理店の多さです。韓国では、日本ではあまり馴染みのない韓国料理もたくさん頂きました。街中や、デパート、大学や寮の食堂を見ても、ほとんどが韓国料理またはそれに近いものであり、洋食はあまり見かけませんでした。日本では日本料理のレストランも多いですが、それと同時に洋食店も多いと感じます。韓国人は韓国料理を大切にされているのではないかと感じる瞬間でした。そして、キャラクターです。韓国では韓国発祥の通話アプリ「カカオトーク」が主流であり、雑貨店やコンビニを見ると必ずそのキャラクターをモチーフにしたグッズが販売されていました。一方、日本のキャラクターも人気ではあるものの、ディズニーなどの欧米系のキャラクターグッズはあまり見かけなかったような気がします。私個人の感想によるものですが、以上の点から、私は韓国人は自国のものを大事にされる傾向・習慣があるように感じました。

韓国語に関しては、授業は全て韓国語で行われましたが、その他の活動は全て日本語で説明を頂いていたので、思いの外韓国語を使用する機会はありませんでした。韓国人のパートナーも私達には全て日本語で話しました。私の周りにも、その点を物足りなく感じていた学生がいました。私自身も、1人で買い物をする機会を設けて、できるだけ現地の韓国人と韓国語で話すようにしていました。私が他のお茶大生がソウルに行っている間、釜山に1人残ろう、と思ったのも、それが理由でした。私は韓国自体には行ったことはありませんでしたが、釜山に行く前から「もしかしたら韓国では韓国語を話さなくても生活できてしまうのではないかと感じていました。なぜなら、韓国には日本語を話せる人がたくさんいる印象が強く、さらに外国語大学で研修が行われたからです。しかし、私は「日本語だけで済んでしまう」ということにかえて不安を感じていました。それは、日本語ですっと通していれば相手国へのリスペクトにならないかと思ったからです。韓国に行くのだから、生活習慣や言語も向こうのペースに合わせるのが良いと考えていました。また、教育実習においても、韓国語を知っていて日本語を教えるのと、韓国語を全く知らずに日本語を教えるのではきっと違うだろう、韓国人学生の日本語学習方法をより理解すること

に繋がるだろうと思いましたが、ただ教えるだけでは一方的、圧力的ではないかと感じていました。日本と韓国の歴史を考えても、こちら側が一方的に何かをしたり自分達のペースを持ち込んだりしてはいけないような気がしていました。そのため私は日本で韓国語を学習してから研修に臨みました。実際韓国に行ってみると、「日本語だけで済んでしまうのではないか」という予想的中しました。周りの学生は日本にいるように振る舞ったり、日本語が話せる韓国人に対してまるで日本人に接するかのようなスピード、言葉遣いで会話をしたりしていましたが、私は自分が行動するとなるとそれが不安でなりません。韓国にいながら日本人のペースに合わせてもらうことを申し訳なく思い、また日本語をずっと使い続けることが負担になっていないか心配でした。そして、韓国の人は実際は日本人のことをどう思っているのだろう、と考えていました。幸いなことに、韓国では全員が優しく接してくださり、とてもありがたく感じました。しかし、私はやはり韓国語のみを使って街を回り、韓国の生活を体験してみようと思い、3週間のプログラムが終わって他のお茶大生がソウルへ行ったのを機に、1人で街を旅してみることにしました。そこでは、店での会話で何と言っているか、電車ではどのようなアナウンスがあるかなど、3週間のプログラムでは細かく気づけなかったことにも気づくことができました。インターネットが屋外で使用できないため韓国語を使って街の人に質問をしてみると、韓国人のコミュニケーションスタイルを知ると同時に自分自身の達成感も感じました。1人で訪問した観光名所ではスタッフの方から韓国語で説明も受けました。韓国語を通してこそ感じられる韓国の文化もあるのだな、と感じ、相手国の言語を知ることの重要性をさらに強く感じました。

2. 日本語教育実習

私は大学院生ではありますが、大学院入学後から日本語教育を専攻しまだ経験が浅いため、教育実習において全てが挑戦であると感じましたが、中でも最も困難だと感じたことはCan-doの概念と全て日本語で行う、ということです。Can-doが私自身も経験したことの無い学習法だったので、難しく構えてしまったところがありましたが、後でゆっくり考えてみれば内容をもっと工夫できたと思うので、次に実習をする機会があれば頑張りたいです。また、全てを日本語で行うということは、語彙レベルのコントロールも必要なので、新出語彙を日本語のみでどのように教えるかが難しかったです。そして、全体的に、私は自分の言語学習経験をあてにしていると思いました。私は自分自身が様々な言語を勉強してきたため、学習者がどういう気持ちかわかると思い込んでいたところがありました。しかし、私の学習法は、よく考えてみると授業でも間接法が多く、自己学習でも媒介言語使用（英語を使ってスペイン語を勉強する、日本語を使って韓国語を勉強する、など）がメインだったので、今回の方法とは全く違うものでした。また、自分では気が付かなかったのですが、授業内での語彙説明が難しいとフィードバックを受け、「和田さんは言語が得意だからいいかもしれないけど…」との指摘も受けました。自分の学習方法の振り返りと多様な学習者の分析の必要性が感じられました。

また、自身の性格・態度にも大きな反省点がありました。問題点は大きく3点あります。1つ目は、緊張しやすい、という点です。私はスピーチなど人前で話す時に緊張しやすく、原稿を用意していてもうまく話せないことが多々あります。今回の実習の最初の授業でも、緊張のあまり頭の中が真っ白になってしまい、原稿を手にしていても関わらず内容をとばしてしまいました。また、その後授業のペースをうまく挽回することもできませんでした。

2つ目は、人と仲良くなるのに時間を要する、という点です。今回の実習では授業を2回担当しました。学生とすぐに仲良くなり、授業内でコミュニケーションを取ることが理

想ですが、私は2回の授業では学生となかなかうまくコミュニケーションが取れずにとどましい授業になってしまいました。しかし、よく考えてみれば、私は普段から人と仲良くなるのに時間を要しているな、と思いました。実際、事前授業があったにも関わらず他のお茶大生と話すようになったのは釜山に行ってからでした。

3つ目は、気楽に構えることができない、という点です。私は、授業で失敗をするとそれに引張られてしまい、うまく挽回ができませんでした。自分の失敗ばかり気になり、それが元で授業中も自信がなくなってしまう、悪循環でした。授業で失敗しても、それを笑い飛ばして授業のアイスブレイキングができたらどんなに良かったらうと思いました。他のお茶大生の授業も見学しましたが、彼女たちはそこをうまくやっていると感じました。ミスがあったとしても引きずられず、切り替えて授業を進めており、自分も次はそうしたいです。また、私は実際に日本語教師になりたいと思っているため、失敗できないという思いが強く、そのことでかえって固くなっていたところがありました。一方、他の学生はのびのびと、楽しそうに授業をしている印象があり、その楽しさが学生にも伝わって相乗効果があるなと感じました。自分に楽しむ余裕があれば良かった、というのが一番の後悔です。

性格には良し悪しはないと言う人もいますが、教師になるためには、これらの点は改善すべき課題だと考えます。

3. 複言語・複文化プログラムについて

今回の6週間の複言語・複文化プログラムにおいて感じた点は3点あります。まず、たとえ完全でなくても、少しでも異文化・異言語を知っているということは個人の物の考え方に大きな影響がある、と感じました。表現の方法や行動の仕方がどのようなものであるかを知ることで、自分と違う文化を共有する人々がどのような価値観を抱いているか、自分たちとのそれとどこが共通していてどこが違うかに気付くことができます。また、様々な文化があることで、日本の文化が当たり前ではないことに気が付き、自国のことも客観的に見ることができます。今回の研修ではカルチャーショックというほどの衝撃を受けたり異文化に戸惑ったりすることはなく、韓国の方のおかげで異文化を楽しく受容することができました。

その一方で、今回のプログラムでは多様な文化体験により複文化は得られても複言語の取得はそれよりは難しかったのではないかと思う箇所もいくつかありました。それは、前半の研修で思うように韓国語を使用する機会がなかったからです。先にも触れました通り、日本人や韓国の日本語学部の学生と多くの時間行動をともにし、説明も全て日本語で受けていたので、結局は言語的には日本のペースに合わせてもらっていたと感じます。実際、韓国語の授業内で習ったことを外で使うようクラスの先生は助言していただきましたが、団体に動いている以上使う場がありませんでした。ツアーのように名所を案内して下さるのも大変うれしいことですが、韓国語講座があるならばそれを実践できる場ももっとあってほしいと思います。

そして、今回の海外経験で、私は改めて自分の中に「日本人」という1つのアイデンティティに固定化されることのない多様な自分がいることに改めて気づきました。私にはその時話す言語によって自分の行動、コミュニケーションスタイル、さらには性格も変わる、という経験があります。それは、日本で英語を使ってコミュニケーションをする際や、スペインに留学した際に感じたものです。普段日本語で話す時よりも、欧米語で話す時の方が前向きだと感じたこともあります。例えば、誰かに自分のために時間を割いてもらった際、日本人だと「すみません」を多用するかもしれませんが、英語ではそのかわりに「ありがとう」を使います。話す単語が変わることで、感情や物の考え方も変わりました。人

の話す言語の中には、その言語を共有する人々の価値観や文化も反映されていると考えます。したがって、その言語を話せば、自然とその国の文化や価値観も理解できるように感じました。それによって、韓国では普段日本で生活している自分とは違う自分がいたように思えました。私は平素より、例えば「日本人であるから、～」「女性であるから、～」というような、1つのアイデンティティだけを強く感じることはありません。言語習得や留学の経験のおかげか、日本人でありながら日本というものを客観的に見ることができると考えています。それは今回の経験でさらに強化されたと思います。韓国にいて、「〇〇人とは何だろう」ということについて考え、「自分は〇〇人というよりは、むしろ地球人、人間でありたい」という思いも強くなりました。これからも、文化や国籍、言語、歴史に捉われることなく、個人として、1人の人間として人々と対話をしていきたいです。今回のプログラムでは、日本人と韓国人双方に触れ、韓国人個人との触れ合いを通じて彼らがどのようなことを考えているのかも知る機会もあったので、とても良い機会でした。その一方、研修において日本人学生だけでなく他国出身の学生とも一緒に活動ができれば、より文化やアイデンティティについて考えることができたかなとも感じています。

日韓学生フォーラムは自分の実習が重なりプログラムに参加できなかったため、次回このような機会があれば参加してみようと思います。

最後に、今回のような機会をくださった森山先生、お茶の水女子大学の皆様、釜山外国語大学の皆様に感謝申し上げます。